

発行：熊谷市立江南文化財センター

TOPICS

「幡羅官衙遺跡群」の史跡国指定

幡羅官衙遺跡群は、深谷市と熊谷市にまたがって広がる古代幡羅郡の郡家（郡役所）跡とその関連施設の遺跡です。深谷市には郡家跡の幡羅官衙遺跡、熊谷市には、祭祀場跡の西別府祭祀遺跡、寺院跡の西別府廃寺、幡羅官衙遺跡と同じ郡家跡の西別府遺跡があります。このうち幡羅官衙遺跡と西別府祭祀遺跡が、地方役所の構造や立地を知る上で大変重要な遺跡であるとして国の史跡に指定されることになりました。

遺跡は、7世紀後半～11世紀前半（飛鳥時代～平安時代、約400年間）の郡役所の全体像が把握できるとともに、その変遷の過程が確認できる希有なものです。当時は、律令制度による天皇を中心にした中央集権国家の時代で、全国には70を超える国があり、この地は現在の埼玉県と東京都にあった武蔵国21郡のうち幡羅郡に所属しました。幡羅郡域は、おおよそ現在の熊谷市域の荒川以北と深谷市の東の一部であったと推定されます。郡家では、地方の有力者から任命された郡司による政治が行われ、その定員数は中郡規模の幡羅郡では4人と定められていました。

これまでの深谷市・熊谷市の発掘調査により、幡羅郡家では、当時税であった稲を収納した倉庫群（「正倉院」）、郡司や、国内を巡行する国司が宿泊したり、接待のための宴会が行われた「館」、宴会の食事を準備したり、食料や食器を管理していた「厨家」など様々な施設が発見されています。しかし、郡家の中枢施設で、郡政治の執務や儀式などを行っていた「郡庁」と呼ばれる施設は、未だ発見されていません。また、幡羅郡家には、近接して祭祀場や寺院がつくられ、郡家にとって重要な役割をもち、郡家とともに機能していました。

祭祀場【西別府祭祀遺跡】は、現在の西別府湯殿神社境内を中心に所在し、神社社殿裏の低地ではかつて豊かな湧水があり、7世紀後半は石製模造品、8世紀



祭祀場【西別府祭祀遺跡】(湯殿神社裏の堀の様子)

以降は土器を用い、11世紀前半にかけて、豊かな水の恵みや郡政治の安寧を願い祈りが捧げられていたと推定されます。

寺院【西別府廃寺】は、仏教の力による郡政治の安定等を願って、8世紀～9世紀の約200年間、僧侶によって仏に祈りが捧げられていたと推定されます。郡家・祭祀場・寺院の三要素が揃うのは全国的に見ても少なく貴重で、他には岐阜県の弥勒寺官衙遺跡群や神奈川県の下寺尾官衙遺跡群が知られています。(吉野)

左写真：西別府祭祀遺跡出土石製模造品【県指定文化財】

（石製模造品：柔らかく加工しやすい滑石という石を材料として、馬・櫛・勾玉・剣などの形をまねてつくった祭祀に使われた道具。）



市内遺跡発掘情報

平成 29 年度上之土地区画整理地内遺跡の発掘調査について

市内上之では土地区画整理事業を進めるにあたり、事前に発掘調査を行っています。今回は、平成 29 年 4 月から 6 月まで実施した藤之宮遺跡の調査についてご紹介いたします。

今回の調査では、古墳時代前期（約 1,600 年前）から平安時代（約 1,000 年前）までの遺構・遺物がたくさん見つかりました。特筆すべきこととしては、平安時代の井戸跡が 2 基見つかったことが挙げられます。いずれも円形に掘り込まれた穴の下部に加工した木材で四角い木枠が組まれており、木枠内からは土器の他に、下駄や曲物、「^{かせ}棹」と呼ばれる糸を巻き取る道具など水分を含む低地でなければ残らない木製品なども見つかりました。（松田）



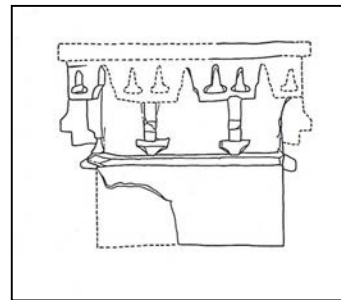
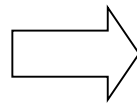
西別府廃寺の整理作業

現在、昨年度発掘調査を実施した西別府廃寺の整理作業が佳境を迎えています。この遺跡は、この度国指定史跡になる幡羅官衙遺跡群の一部であり、この遺跡群の性格を知る上で重要な遺跡となります。また、この遺跡は、今から 1, 100 年前ごろから現在の西別府地域にあった寺院の遺跡です。

今回の整理作業の中心は大量に出土した瓦（4,300 枚）、瓦塔（素焼で作ったミニチュアの仏塔）（90 点）を実測、トレースすることで、これらを下図のように図面化していきます。他にも幾つかの作業がありますが、こうした作業を経て、3 月には報告書として製本・刊行される予定です。（腰塚）



瓦塔の一部（塔の壁面）



実測・トレース後の図面

連載 くまがやの古墳群

⑮ 原島古墳群 —実態が不明な古墳群—

原島古墳群は、原島地区の荒川左岸の自然堤防上に所在する古墳時代後期に造られた古墳群です。すぐ西には、やはり実態が不明な玉井古墳群が所在します。現在 3 基の古墳の存在が確認されていて、熊谷市スポーツ・文化村「くまびあ」を中心に狭い範囲での分布です。

3 基の古墳は、各々消滅、墳丘削平の状態、唯一墳丘の状態が分かる古墳が、くまびあの南に鎮座する八坂神社の境内北東隅に所在します。現況での規模は、東西 8 m、南北 15. 5 m、高さ 1 m ほどで、墳丘の南西部が遺存しているものと思われます。全国的に見ると、墳丘上に社を祀ることが多い中、古くから神聖な場所であったこの場所を選んで、墳丘を避けて社が造られたのではないのでしょうか。ちなみに、八坂神社は、かつて鬱蒼とした林の中に在り、「天王社」と呼ばれていたことから現在も「天王様」の通称で親しまれていて、本古墳は現在無名ですが、この名を借りて天王塚古墳とも言えますでしょうか。（吉野）



八坂神社境内に所在する古墳（中央、右が神社社殿）

◇聖天堂関連事業—絵馬展・国宝5周年—

妻沼聖天山本殿「歓喜院聖天堂」が平成24年7月に県内建造物で初めて国宝に指定されてから5周年を記念して、妻沼聖天山に寄進された絵馬や奉納額を一堂に集めた特別展「妻沼聖天山の絵馬展」を妻沼展示館で開催しました（7月～8月）。

聖天山は関東一円から広く民衆の信仰を集め、江戸後期から昭和にかけて様々な内容の絵馬や額が奉納されました。これら約50枚は聖天堂の内外に掲出されていましたが、平成15年からの平成の保存修理工事の際に外されて境内に保管され、非公開でした。

同展の絵馬には「韓信の股くぐり」「川中島合戦」「七福神」など中国や日本の故事などを題材に色彩豊かに描いたものが多く、明治期の女流画家・奥原晴湖が記した「鶏羅山」や、幕末期から明治期に活躍した政治家・思想家の山岡鉄舟が明治14年（1881）に納めた書の額「歓喜天」などがあります。柔術流派を興した小沼直吉を顕彰する「武芸」は同展内で最大規模を誇り、千人を超える寄進者名を連ねています。明治時代の聖天山を描いた複数の大絵馬は歴史資料の価値を併せ持ちます。

熊谷市教育委員会は平成29年5月以降、絵馬と奉納額を妻沼展示館に移し、調査と保存作業を進めてきました。その結果、絵馬と奉納額の額縁に施された精巧な彫刻の多くが国宝に指定された本殿彫刻を担当した上野国花輪村（現群馬県みどり市）の彫物師集団の流れをくむ彫物師の作品であることが分かりました。また、半数近くの額は群馬県の人々が奉納していたことも確認されました。

7月29日には同会場にて、特別観覧会として、解説会とヴァイオリンとピアノによる演奏会「祈りの響き」が開催され好評を得ました。また、8月にはニュージーランド・インバーカーギル市国際視察団が同会場を訪れました。会期全体で約1600名の入場者がありました。（山下）



◇農業遺産に向けて「池の水ぜんぶ抜く」調査

比企丘陵を中心に古くから受け継がれる米作り「ため池農法」を世界農業遺産に申請しようと、滑川町・熊谷市など8市町やJAなどによって「比企丘陵農業遺産推進協議会」が設立されています。



大きな川がない比企丘陵周辺では、谷間にある「谷津田」と呼ばれる水田で、ため池の水が利用されてきました。こうした自然環境を生かした歴史の中で、水利の調整や沼普請、沼さらいなどの共同作業、農村コミュニティが形成されてきたと考えられています。地域の文化遺産や歴史などを含む農業遺産としての再認識を深めるために、小江川にある「日向沼」（写真：水抜き後）の水を抜き、生息している魚などの調査が行われました。在来種が多く発見され、自然環境が保たれていたことが分かりました。その様子がテレビ東京の「池の水ぜんぶ抜く」という番組として収録、本年1月に放映されました。（山下）

【文化財探訪

せんだい いいたま 千代・飯玉神社】

飯玉神社は、穀物の神様とされる豊受姫命を祀っています。こじんまりとした本殿は社叢に囲まれ、眼前には一つ目の魚が棲んでいるとの伝承がある「お池」と呼ばれる沼があります。道を挟んですぐ東隣には宮下遺跡が広がっています。昨年^{しやせう}の発掘調査では古代の小鍛冶工房がみつかりました。当時の工人は鍛冶炉を片眼で覗き、火の色で温度を判断し鍛冶を行いました。しかし、鉄を溶かすほどの高熱は、眼に悪影響を及ぼし、片眼が見えなくなることもあったそうです。身体を犠牲にして、大勢の生活を支えていた人々がいた事実が、伝承として形を変えて伝わっているものと考えられます。（蔵持）

【所在地：熊谷市千代 625】



文化財コラム 空から見た遺跡

【三ヶ尻地内の館跡】

昭和58年三ヶ尻地区のほ場整備事業の実施に際し、黒沢館跡の発掘調査が実施されました、その結果渡辺華山の『訪瓶録』に描かれた伝黒沢屋敷跡の濠割が姿を現しました。出土遺物の大半はかわらけや板碑片などでしたが15世紀後半の一時期を示しており、古河公方と管領上杉氏の争乱(享徳の乱)、扇谷・山内の両上杉氏の抗争(長享の乱)の頃に館が造られたと考えられました。この頃は、関東では各所に城郭が造られ、市域でも村岡において熊谷の渡しを回る戦闘が度々起っていたようです。

館跡の主郭は一辺が約60mの長さを有し、上幅約3m、深さ1mの濠がほぼ台形に回っていました。城塞としては小規模に見えますが、昭和49年撮影の航空写真を見ると「ふるぼり」と呼ぶ南東を走る水路の配置と主郭の南前面から東北側の屈折の位置とに一致することが窺えます。この「ふるぼり」と主郭の前面が曲輪を形成していたと想定されます。

この防備は南東方向一村岡の渡し方向に当たっており、石原～広瀬方面より進攻する敵を迎え撃つ備えとみられます。なお、航空写真では黒沢館西側にも大きな方形区画がみられ、黒沢館跡と関連した土地利用が行われた可能性があり、一体の曲輪であったかも知れません。

新編武蔵風土記稿には次のような記録があります。「黒沢武蔵守義政というものの、居りし跡なりといへり、また文明5年(1473)長尾春景古河公方成氏の後詰として、男衾郡鉢形の城に楯籠り、夫れより埼玉郡成田へ出陣せし時、太田入道道灌も馳向ひ、荒川を渡り当所に陣して、両陣の間を遮りしと云うはこのところなり。」(参考：『熊谷市史』資料編1考古)(新井)



報告 d design travel KUMAGAYA の試みー熊谷リテラシーとはー

現在、熊谷市観光協会や市民ライターが中心となり熊谷の観光や文化などをロングライフデザインの観点から探求するガイドブック「d design travel KUMAGAYA」の制作が進められています。そのワークショップにて「熊谷ブランドのための社会学」という講座を開催しました。その中で、熊谷に息づく文化遺産、美術、商品、食文化に潜む「熊谷らしさ」とは何か、その「らしさ」を解釈する力を熊谷リテラシーと表現しました。なぜ熊谷には、古くは埴輪から、近代の養蚕や麦文化、現代のまちづくりに至るまで多様な「熊谷らしさ」の文化が誕生し、育まれたのか。こうした点について見つめ直す機会となりました。(山下)



編集後記 「幡羅官衙遺跡群」と「陸王」

「幡羅官衙遺跡群」が国の史跡指定されるという朗報を今回誌の冒頭にて紹介しました。昭和30年代の遺跡発見から、数多くの遺跡発掘調査の実施、指定に向けての調整など、過去を振り返ると貴重な遺跡の保存と理解に向けて、多くの時間と努力が必要でした。文化財の保存は一種の情熱とともにあるように思います。これらの経緯に着目すると、行田市の老舗足袋メーカーをモデルとしたテレビドラマの「陸王」が思い浮かびます。創業100年以上続く老舗「こはぜ屋」がランニングシューズ「陸王」の開発に挑み、奮闘する姿が感動を呼びました。目標に向けて努力を積み重ねる。「幡羅官衙遺跡群」の保存と「陸王」との共通点を感じています。



発行：平成30年1月25日 (2018/01/25)

熊谷市立江南文化財センター (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係)

〒360-0107 熊谷市千代329番地

電話 048-536-5062 FAX 048-536-4575

メール c-bunkazai@city.kumagaya.lg.jp

HP: 「熊谷デジタルミュージアム」 <http://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/index.htm>

ブログ「熊谷市文化財日記」、熊谷市観光文化財ナビゲーション・アプリ「くまここ」更新中